ガラスをつくるというよりも、
〝光〟を見出し、引き出すことが
自分の仕事かもしれない

Q+A vol.10

ガラス作家への6のQ+A

西中千人

写真 五十嵐隆裕（ゴーニーゼロ）　文 鈴木 行
協力：古川美術館 分館 爲三郎記念館
www.furukawa-museum.or.jp

にしなか ゆきと｜1964年、和歌山県生まれ。星薬科大学薬学部卒業後、カガミクリスタル勤務を経て渡米。
カリフォルニア芸術大学で彫刻とガラスアートを学ぶ。98年、ニシナカユキトGLASS STUDIO設立。国内外の画廊で個展を行うほか、
ニューヨークやロンドンのアートフェアにも出品。受賞歴多数。http://nishinaka.com/

ガラスを意識したのはいつですか？
あるガラス工房で、ドロドロに溶けてオレンジ色になったガラスに衝撃を受けました。地球の欠片の砂が、液状の動き回る物体に変容していくさまを見て、どうしても自分の手でやってみたいと思ったんです。それから、ガラスをやるのならアメリカへ行くべきだとアドバイスされ、すぐ渡米しました。

カリフォルニアで得たものは？
古代エジプトで始まり、中世のヴェネツィアではすでに吹きガラスの技術が確立していたように、長い伝統をもつ西洋に比べ、日本にはガラスの文化的背景が足りない。ところが、どれだけ勉強して技術を磨いても、やればやるほど日本人である自分のアイデンティティをいやおうなく考えさせられます。であれば、日本の伝統文化を現代の技術で表現するのが自分のスタイルじゃないか、と。

西中作品を代表する「呼継（よびつぎ）」について教えてください。
陶芸で「金継」という技法がありますね。割れた器を漆で接着し、継ぎ目を金で装飾するのですが、割れやひびを隠すのではなく、あえて強調することによってそこに景色を見出し愛でる、日本固有の文化です。
「呼継」も、もともと陶芸からきた考え方で、色の異なる陶片をつなぎ合わせて再生する手法ですが、僕はそれをガラス片でやったわけです。

一種の見立ての美でしょうか？
日本人には質素なモノ、不完全なものに美を見出そうとする気風がある。呼継の作品は、叩いて割ったときに偶然生まれるひびをそのまま活かしています。ところが西洋の考え方は、ひびなどなかったかのように、完璧なまでに修復する。「ひびがきれい」な作品は展示されません（笑）。

欠点が個性になる？
割れ、欠けというガラスにとってマイナスだと思われることが、継がれることで再生し余白さえ生む――そこに70億分の1のオリジナリティがある。この日本独自の「継ぎの美学」は、西洋人に理解してもらうのは難しいと思っていましたが、海外のアートフェアでの「呼継」に対する反応はとてもよく、意外なほどあっさりと受け入れられています。

今回の特別展の会場は数寄屋造りと日本庭園です。
縁あって名古屋・千種区の爲三郎記念館がお声をかけてくださいました。昭和9年の竣工時の数寄の姿を今に残す故・古川爲三郎氏の終の住処です。日本庭園に自分のアートが共鳴するのはたとえようもない悦びです。うつろう光と水を映しながら、生命のかたちを宿したガラスがゆらぐ……。日本庭園の祖といわれる夢窓疎石（国師）へオマージュを捧げました。ただ、こういった大がかりなインスタレーションはしばらくお休みです。でも、アブダビのイスラム庭園から依頼があれば、すぐにでも（笑）。